戦後、筆者は、軍隊時代の自動車部隊での体験を生かすように、軍隊当時運転技術の教育を受けた者として交通安全協会発足と同時に会員となり、「原付許可証」から「自動二輪」「大型二種」「普通二種」「三輪車」「大型特殊」等の整備免許も持っている。

また、平成十（一九九八）年八月、第十二次最上地区文化交流訪中団員として上海、重慶視察に参加し、戦時中の思い出と共に感慨を語っているが、労苦体験としては割愛しました。そして

「若き日終戦を上海で受け、米国の島々で奴隷として一生を終るかと覚悟をしたことがある私共は、八十歳の年も越え今日があることに対し幸と思い、余生を送りたいと思います。

大正、昭和、平成と世界の変動を一身に受け、この世に生を受けたことを喜びとするところであります」。と語り終えられました。

陸軍の暗号兵として

愛知県　加藤清高

私は大正十一（一九二二）年四月二十七日、愛知県知多郡鬼崎村（常滑市）に生れた。家族は、父、母、私が長男、弟二人、妹二人の家族で、生れ故郷はのんびりとした半農半漁村で、常滑焼の工場の煙突から吐き出す煙で畳はいつも真黒だった。

そして半田商業学校を卒業して、大阪の朝鮮満州雑貨貿易商に勤務し、昭和十七（一九四二）年三月、徴兵検査で第一乙種合格、同十八年二月に現役入隊することが決まり、社長に退職を申し出た。

「お前は来年兵隊に行くのに何を考えているのだ、この馬鹿者が。退職金はやらぬぞ」と言われたが、「ハイ」結構ですといい、積立金だけ受け取り退社した。それから一人で雑貨商を始めまし

た。

当時は物資の無い時代だったので品物さえ集めればいくらでも売れ、面白いほど儲かりました。商売を朝鮮、満州さらに支那（中国）と広げたかったほどだった。相当な大金を父親に渡し、「今度会う時は靖国神社で！」と言ったら「ワァ―」と大声を出し、畳に伏せて泣き出した。「男子の本懐とか、軍人に非ずんば人に非らず」などと勇ましいことを言うが、私は本当に軍隊に入りたくなかった。

昭和十八年二月二十日、福井県鯖江の中部第六十四部隊に入隊した。兵舎で卒業以来久しぶりに旧友に会い、懐かしさでにぎやかに騒いでいたら古年兵が入って来た。「貴様ら！娑婆気が抜けておらん。今から軍人精神を叩き込んでやる」「一列横隊に並べ！」「歯を食いしばれ！」とたちまち往復ビンタが頬に炸裂した。よろめくのを両足で踏ん張る。「目から火花が散った」。こんなにひどく殴られたのは、生まれて初めてだ。

入隊七日目の早朝、父母、祖母、五歳の弟が昨日から泊りがけで面会に来てくれた。祖母が「おはぎ」を持って来てくれた。おいしかった。親父が私の腫れて変形した顔を見て、心配そうにどうしたのだと聞く。毎日、軍人精神注入のビンタをくっていると答える。親父は何も言わずに「うー」と唸ったきり。「親父！俺たち今夜どうも中支へ出発するらしい」と小声で伝えた。

昭和十八年二月二十七日、鯖江を真夜中に出発した。昨年の六月五日、ミッドウェーの日米海戦で日本海軍は壊滅的に大敗し、海も空も米軍の制圧下に入り、東シナ海にアメリカの潜水艦が出没、船で東シナ海を渡ることは困難になっていた。

我々を乗せた軍用列車は釜山・京城（ソウル）・平城（ピョンヤン）・天津・徐州そして蚌埠で准南線に乗り換え、大隊本部のある下糖集に到着した。そこからトラックで一時間ほど走った野原の中にあった土壁造りの第三中隊に到着した。鯖江を出発してからここまで一週間掛かった。

独立歩兵第六十大隊の第三中隊（安徴四河口）に入隊した。そして軽機関銃班に編成され地獄の初年兵教育が始まった。誰もが班長室に食事を運ぶ者がいないので、私が大声で「入ります！」と言って食膳を差し出したら！　捧げていた食膳をいきなり足で蹴っ飛ばされた。私の顔面に味噌汁、飯がもろにかぶり、「お前の口臭が掛っている。膳は目の上まで上げて持って来い」と言われた。こんな侮辱を受けたのは初めてだ。

初年兵たちが集まってきて、私の服を拭いてくれたり、食事を新しく揃えてくれた。「飯」の上に私の頭の「フケ」をかき落し、味噌汁の中に「つば」を吐き入れて、目の上より高く差し上げて持って行った。以後二度と班長室へ食事を運ばなかった。

初年兵教育が始まって十日ぐらいしたころ、ずんぐりした背の低い頑丈な身体の池田兵長が入って来た。「これから俺がお前たちの面倒を見ることになった。今までのように甘くはないぞ。今から挨拶がわりに気合を入れてやるから一列横隊に並べ！」「歯をくいしばって、足を開いて踏んばれ」。丸太棒のような太い腕で先頭の初年兵が一発で横にとんだ。次も次も飛ぶ。次は俺だ！頬に「ガーン」と強烈なビンタで身体が一メートルぐらい飛んだ。目から火花が散った。こんな凄いビンタは初めてだ！以後毎日のようにビンタをくうことになった。

軍隊ではビンタで肉体的に徹底的にしごいて、何が何だか分からないように思考力を無くし、いかなる難題で過酷な命令でも文句を言わせず服従させる。恐怖心を与えていれば兵隊の動作は敏捷になり、反射神経だけで動くようになる。半年か一年先輩の古年兵が「上官の命は天皇陛下の命だ」と言っては、何とか理屈を付けてビンタをくらわせ、「お前らは消耗品だ死んでも一銭五厘（ハガキ代）でいくらでも代わりが来る」と言う。

どの班にも「ドジ」な兵がいて、いつも「ヘマ」をやらかすと戦友愛が無いと言っては全員ビンタ

をくう。一番辛い、たまらないのが対抗ビンタである。古年兵はタバコを吸いながらこれを見て楽しんでいる。私の銃の手入れが悪いと言っては夜中に三時間も捧げ銃をさせられたり。私が眠っていると叩き起こされて軍靴の底の土を舌で舐めさせられたりする。

日曜日は訓練は無く、班内で休んでいたら、古年兵が「加藤、こっちへ来い」と古年兵の兵舎に連れて行かれ、山と積んである白い敷布を洗わされたり、歩いていたら初年兵のくせに生意気だと言っては殴られる。言い訳をしようとすると「文句があるか」とまたひどく殴られる。初年兵でも耐えることにも限界がある。いっそ死んだら楽になるだろうな！　過酷な訓練もビンタも腹も減らない。何もしなくていい、天国だ。しかし死ぬより病気にでもならないだろうかと、生水（クリークの泥水を濾過）を飲むと、アミーバ・コレラになるから絶対飲むなと言われていたのを承知で、がぶがぶ飲んでみたが、腹が痛くならないし下痢もしない。

夕暮れ、ある初年兵が風呂敷を抱えて兵舎を出ようとするので「お前どこへ行くんだ」と聞くと「家に帰る」と行って営門の方へ歩いて行った。毎日陰惨な「いじめ」で頭がおかしくなってしまったらしい。他の中隊では初年兵の首吊り自殺があったらしい。

敵がいつ襲って来るか分からないので、いつも実弾を持っている。照りつける太陽を背に行軍、野原を駆け回り匍匐前進させられ、あの小高い丘へ突撃の号令で「ゴォー」と喚声を叫びながら駆け登ると畑になっていた。「休憩、裸になれ！」と、今地平線のかなたに大きく真赤な夕日が沈んで行く、景色を眺めながらタバコを吸う。訓練の後は格別にうまい。夕陽も沈み、真っ暗闇にタバコの火が「パー」「パー」と光るのみ。

突然、裾野から「パーン」と銃声がした。続いて撃って来た。池田班長が「敵襲だ！」「タバコの火を消せ！」と叫ぶ。裾野から中国語のざわめ

き声が聞える。私はとっさに畑の溝に伏せ両手を差し伸ばした。「俺の命もこれまでか」と思った。私は死に直面した時、次のようなことが走馬灯のように脳裡を駆け巡った。

一　二十一年生きて今ここでフンドシ一枚で死ぬとは

一　俺の死体は野犬に食い荒らされて無残であろうな！

一　せめて人間として畳の上で死にたかった

一　一度は結婚して夫婦生活がしたかったな

一　父母弟妹のことが頭の中をかすめる

班長が私の尻を軍靴で蹴り上げ、起きて戦えと怒鳴る。敵兵の声が間近に迫って来た。しかしこっちは素裸で銃も剣も持っていない、恐怖心はなかった。俺はここで死ぬんだと言うことだけが頭にあった。また、背中や尻を蹴られた。「戦え！戦え！」と叫ぶ。

真っ暗で何にも見えない、手さぐりではい出した。確かにこの辺に銃や弾を置いたはずだが無い。おかしい、やっと帯剣を手にした。どうせここで殺されるのだ。帯剣を引き抜いて、剣を振り上げながら敵の中に突進して行ったら！　銃剣が三本私の腹に突き止っていた。「訓練止めー」の号令が掛かった。

この時は本当に敵襲かと思った。これが初年兵教育の総仕上げの一幕であった。

初年兵教育が終わって、初めて不寝番勤務に着く。「古年兵の起し」があり、いくら呼んでもぐっすり眠っていて起きないので、強く振り動かした。半身起きて「分かった、分かった」と二度も言ったので安心して次の不寝番と交代して眠った。

中隊全員朝の点呼時、週番士官が「昨夜の午前三時から四時までの不寝番勤務の兵隊前に出ろ」。「ハイ！自分であります」と二、三歩前に出る。「昨夜古年兵の連絡兵を起こしたか」私が答えようとしたら、横から池田班長が飛び出して来て「貴様！」と言いながら強烈なビンタが顔面に炸裂、体が一メートル飛んだ。倒れている私の胸倉をつ

かんで立たせ右頬にビンタ、目から火花が散る。気が狂ったようにわめきながら私の顔を軍靴で踏みつける。蹴飛ばされ、殴られ、これは殺されると思った。そして神経が麻痺して殴られても痛みを感じなくなって気を失ってしまった。

気が付いたら自分の床の中であった。頭が「ガンガン」とする。顔が腫れ、顎は外れ、全身あざだらけ。どうして自分がこんな目に合わなければならないのか、さっぱり分からない。池田班長に聞きに行った。加藤が昨夜古年兵を起こさなかったために重要な連絡が出来ず、今朝古年兵が馬で飛んで行ったのだ。「自分は二度も古年兵殿を起しました」。班長は「うんー」と言った切り黙ってしまった。

昭和十八年六月下旬ごろ、徐州第六十五師団に編成され、部隊移動中、けがで蛙埠陸軍野戦病院に三日間入院した。新警備地区の准陰まで列車、トラックを乗り継いで三日掛かって到着した。第六十大隊は陳毅の新四軍と対峙していた。皆討伐に出払って誰もいない。薄暗いランプの明りの兵舎に寝転んでいた。

古年兵が入ってきて「お前が、加藤か」「ハイ」「そうであります」「お前は明日、徐州暗号教育隊へ出発せよ」と言われた。暗号教育は何をする所か分からぬが、とにかくこの辺鄙な准陰からはなれることは確かだ。そして池田班長からも逃れられのだ。よし暗号で頑張るぞと心に決めた。

私は中隊に必要のない兵隊だ。移動中に入院したりして厄介払いされたのだ。運転台の屋根に軽機関銃を備えた定期便のトラック二台で早朝准陰を出発した。途中一回トイレ休憩し、砂塵を巻き上げて突っ走り、夕方海州に着いた。連絡宿舎に荷物を置いて街の浴場へ、大きな木製の四角い風呂に二十人ぐらいの中国人が入っていた。ゆっくり湯に漬かる。中国語がにぎやかに聞える。旅の疲れも取れ気分爽快、軍隊に入って初めてのこと。しかも初年兵が一人で自由気ままに旅して楽しんでいるとは考えられないことだ。

二階に上がると中国人がタバコを吸いながら「マージャン」をしたり、お茶を飲み談笑していた。

かくして第六十五師団司令部暗号教育隊に入隊した。

暗号教官　鈴木中尉、教育主任　与那嶺軍曹、各中隊から選ばれた修業兵、百三十人

暗号教育は一から九まで、九から一までを一分間に何字書けるか、これは数字を書く速さで暗号兵として基本的な能力を測定するためのもので、速さと同時に数字の書き違いは特に注意が必要であった。

次は非算術加減法をいかに早くするかである。与那嶺軍曹がストップウォッチで測定する。暗号修業兵百三十人中いつも早く手を上げる二、三人のトップグループの中にいつも私はいた。暗号兵として特殊な教育に一日も早く馴れ暗号を会得しなければならないと思った。主任の与那嶺軍曹がこの中から司令部暗号班員として十人ほど残す予定であると言われた。その中に入りたかった。大隊の暗号兵より師団司令部の方がはるかに格が上である。

暗号電文に乱数表を使って原文に翻訳するのは、かなり面倒であったが、能力を最大限に使い、死に物狂いで勉強した。あの准陰に帰るか、電気のある徐州か、生と死の境目でもあり悲壮な気持ちで頑張った。

発表があった。百三十人中二番の成績で師団司令部勤務となった。天にも上る嬉しさ！　成せば成る！　俺は努力すれば出来るんだと自信を持った。

徐州第六十五師団は昭和十八年、独立混成第十三旅団を中核として現地中国において編成された警備師団である。九州より一回り広い地域を総兵力一万五千で警備していた。有名な「麦と兵隊」の歌があります。

徐州、徐州と人馬は進む
徐州居よいか住みよいか

酒落た文句に振り返りや
お国なまりの　おけさ節
ひげがほほえむ麦ばたけ

師団司令部の暗号班

班長は鈴木中尉、暗号教育隊でお世話になった与那嶺軍曹、そして先輩の暗号兵が私たち初年兵を笑顔で迎えてくれた。選ばれた優秀な人ばかり。階級の隔たりもなく、民間の会社にでも勤務している雰囲気だった。

朝、夕の点呼も出なくても良く、朝から夕方までの勤務と夕方から翌朝までの勤務で、夜の勤務明けは一日休養の三交代である。中隊にいたころと比べると天国と地獄の違いだ。本当に司令部勤務になって良かったと思った。

昭和十八年十月ごろ、内地から若い女子軍属が司令部の各部に配属されてきた。そして暗号班には笹井君子（名古屋市）が入って来た。私たちが仕事をしている机に熱いお茶を配ってくれるし班内の空気は明るく楽しくなって来た。君子さんに「なぜこんな遠い中国まで志願して来たのか」と聞くと、日本では食料が欠乏して食べ物が無く、そして強制的に軍需工場に入れられる。外地は食料が豊富で腹いっぱい食べられると聞いてやって来ました」と。

昭和十九年三月、日本軍六十二万中国軍三百万、日中戦争最後の大決戦に第六十五師団も出動が決まり、遺言書を書くように言われた。

『遺言書・お父上様、お母上様、
長らくお世話になりました。
ありがとうございました。
昭和十九年　三月三日　　加藤清高』

遺髪と爪を切って遺言書と共に封筒に入れて提出する。

京漢線打通作戦は、日本から釜山・奉天（瀋陽）・北京・漢口・桂林・柳州・仏印・バンコク・シンガポールへの大東亜縦貫鉄道の建設と同時に、沿線の桂林・柳州を米空軍基地としているB29の日本空襲を阻止することにあった。

第六十五師団司令部は三月十日、蛙埠より船団を組んで准河を遡航、船団は曳船（苦力がロープで引っ張る）でのんびりしたもので、菜の花が咲き、次第に変り行く春の風景を眺めながらタバコを吸っている。戦場へ向う危機感等全く感じられない。

私は船底の暗号室で仕事をしていたとき、突然左岸より「バンーバーンー」の銃声と鉄板に当る銃弾の音がする。目の前の船窓に兵隊がドサーと音を立て、落ちて来たので、驚いて机の下に身を伏せた。鈴木中尉が隣に立っていて「加藤は素早いな」と笑っていた。私たち暗号兵はいつも銃を持っていません、帯剣と暗号書、鉛筆を持っているだけです。

徐州を出発以来天候にも恵まれ、広大な中国の原野を野営しながら行軍してきた。「大休止！」の号令が掛ると、一般兵は銃を抱えたまま道端に倒れ込んで眠ってしまう。暗号兵は休憩どころでない。通信兵が持って来る電文を素早く解読し、一刻も早く参謀の所へ届けなければならない。出発と同時に一般兵は歩き出すが、暗号兵はいつも後から駈け足で追いかけなければならない。

四月下旬ごろ、毎日雨が降り続いた。黄土の道は人馬車両の通過で膝まで没する悪路となり、足をとられ下半身は泥だらけ、雨でびしょ濡れ、寒さと過労で誰も声を掛ける者も無く黙々と進む。数人の苦力（クーリー）が力尽き路肩に泥まみれで倒れている。生きているのか死んでいるのか見過ごして歩く。

夜は農家で火を焚いて暖をとり、衣服を乾かしながら、ローソクの明かりで暗号の仕事をしていると、参謀が来て「そのまま」と言いながら励ましの言葉を掛けてくれる。雨と泥の苦闘の日々である、疲労も極限に達し、戦争の悲惨さを味わう。野営は防水加工不十分な雨衣を土の上に敷き横になって眠る。夜「ふっと！」目が覚めると空にはきれいな満天の星が輝いている。

俺たちはとんでもない時代に生れ合せたものだ。紀元二千六百年も続いている日本、有史以来の大

戦争に巡り合い、しかもその渦中に巻き込まれるとは。生きていても面白いこと楽しいこと、何もない。生きて日本に帰れるなんて夢のまた夢！明日をも分からない命だ。星を眺めながら感傷的になり家族を思う。

暗号班は小さな小学校に宿営することになった。教室の黒板にきれいな漢字で「日本軍の無謀な侵略によりいっときここを去るが、必ず帰って来るから破壊しないでくれ」と書かれているのが判読された。私は頭にジーンと来るものがあったので、戦友たちに説明して、壊さないようにたのんだ。

軍はある程度の食糧を携帯させ、後は現地調達せよである。戦線が伸びれば伸びるほど、食糧の補給が続かなくなる。雨の日は乾パンをかじり、泥水を手拭いで浄水して飲む。生野菜は久しく食べていない。大きな農家が司令部の宿舎になり、そこは広い庭や畑で豚やにわとりが放し飼いになっていた。にわとりを捕まえようとすると大屋根に舞い上がるのを見て吃驚した。兵隊たちは隊を組んで豚を囲み捕まえた。私は畑に入り、いんげん豆を採った。久しぶりの野菜料理だが鍋の中は殺したばかりの豚肉から出る血で真赤だ。私はこれを見ただけで気持ちが悪くなり、いんげん豆を探して食べる。

徐州出発以来、三カ月有余の長途の行軍、黄土の砂塵の嵐に遭い、豪雨と泥沼の悪路、炎天下の行軍、第六十五師団司令部は、米軍装備の重慶第十九集団の主力に接近し、目の前の連峰では双方の熾烈な戦闘が行われている上、空を友軍機が旋回しつつ敵陣地を銃爆撃して飛び去る。師団長を中心に幕僚各部隊の将校が並び、その後に我々暗号班が従って歩く麦畑には、無数の弾丸の穴があり、薬莢が散乱していた。

第六十五師団の作戦は敵主力を阜陽防衛に集中させる目的で、いわゆる陽動作戦である。戦闘部隊の敵陣地への突撃、また阜陽への突入は避け、主として砲兵隊の砲撃をもって敵軍に多大な損害を与えて、昭和十九年五月十五日各部隊に反転命

令が下った。そして徐州師団司令部に着いた途端、私は猛烈な下痢になった。

昭和十九年六月上旬ごろ、第六十大隊長三沢大佐戦死の電報を受け取る。私は他の兵隊と共に海州からトラック十数台で砂塵を巻き上げ広野を突っ走り、夕暮れ准陰の大隊本部に到着、暗号解読の仕事を手伝う。

初年兵教育で一緒だった加藤俊雄に会い准陰付近の状況を聞く。私の小学校の友人福三君は腹部貫通で即死、初年兵教育の小銃班長萩伍長は軍刀がボロボロになるまで戦い戦死した。強烈なビンタをくらわされた池田班長は陣地構築中どこから飛んで来たか分からない一発の弾丸が鉄かぶとの下に当り頭を一回りして弾が抜けて一週間意識不明のまま生きていたが、もう治らぬと判断し注射で帰らぬ人となった。分遣隊が敵に包囲され救援に行ったら、全員素裸の死体が野犬に食いちぎられ、肉片が散乱し悲惨な状況だった。城壁の回りの川に日本兵のフンドシ一枚の裸の死体が十五体も流れて来た。

昭和二十年ごろになると戦局は緊迫してきた。東シナ海沿岸の連雲港付近の北方方面には共産八路軍が出没し、南方一帯には（准陰第六十大隊が警備）新四軍の遊撃隊一個師団が蠢動していた。

私は昭和二十年夏、連雲港・海州の南方にある東海戦闘司令所に勤務していた。広い営庭の中にコンクリート造りの二階建の地下室が暗号班の事務室になっていた。一階が参謀部、二階の師団長と参謀の室は風通しがいいが、私たちのいる暗号班の地下室は風通しが最悪の状態、気温も四〇度は優に超える猛烈な暑さで、汗が「ポトポト」落ちる。暗号兵は半裸体で仕事をしていた。しかし一般の兵隊は連日塹壕掘りで汗を流していることを思えば私たちは楽な方で不服を言っている場合では無かった。

暗号の解読をしていると、日本全般の戦況を一番早く知るところとなる。例えば「沖縄の日本軍全滅」「牛島軍司令官自刃」「広島、長崎は今まで

に無い強力な爆弾が投下され、一瞬にして何十万人が死亡せり」や、「ポツダム宣言受諾」とか国際情報の電報が来るようになった。

師団長あての極秘暗号電報が、大本営や第十三軍司令部からたくさん入って来るので、私たち暗号兵は多忙を極め、昼夜交替勤務となる。日本は負けたと誰もが口に出さぬが、どうも日本は負けたと、私は思った。

「八月十五日十二時、天皇陛下のラジオ放送があるので、全将兵に伝達されたし」の電報を受ける。司令所の一階に将校、下士官、暗号兵が集まりラジオを聞くが雑音でさっぱり分からぬ。「忍び難きを忍び」が聞えるが不明。放送が終わって、しばらくして将校から「日本軍無条件降伏」と知らされ、一瞬頭の中が真白になった。地下室に下りると机の上に暗号電報が山と積まれている。今まで不眠不休で暗号の解読に頑張って来たが、日本の無条件降伏を聞いて気力喪失、全くやる気が無くなってしまった。

私は二、三人の兵が仕事をしているのを横目で見て地下室を出る。真夏の太陽がギラギラ照りつけていた。広い営庭にたくさんのトンボが飛んでいたので童心に還りトンボつりをした。夕方になるといろいろな「デマ」が伝ってくる。日本政府は中国政府に中国大陸にいる将兵を賠償の代りに労役に使ってくれと申し入れたとか。将校は死刑、下士官は二十年の重労働、兵は五年か十年の重労働、私たちは日本の負担が少しでも軽くなるようにと、持っていた軍票を全部焼却した。先ほどまでは日本本土の防波堤となって戦死することを考えていたが、無条件降伏を聞き内心ホットした。いろいろ苦難があるが遅かれ早かれ、とにかく生きて日本に帰れる希望が見えて来た。

私は保安隊（日本軍に協力していた中国兵）の一個小隊を一列横隊に並べて「日本軍はいっときここを去るがお前たちではこの広い中国を治めることは非常に難しい。いずれ我々日本が中国にとって必要なときが来る」と日本語で別れの挨拶を

した。

暗号班全員が小高い台地で「暗号書」「乱数表」「極秘書類」を大量に焼却していた夕暮れ、衛兵小隊が「暗号班何をやっとる。師団長以下全員引き揚げるぞ」と言って来た。しかし極秘の書類や暗号書を半分焼却のままで放って帰るわけにも行かず、結局暗号班のみ残留することになった。

夜になると北方の空に狼煙が上がった。しばらくすると、かなた、北方に狼煙が上がる。新四軍が日本軍引揚げの連絡を取り合っているのだ。真夜中に線路が爆破され列車転覆、死傷者多数と電話が入った。私は留守番にされた。夜明けに帰ってきた者の話では、機関車のすぐ後に乗っていた衛兵小隊が石炭をもろにかぶり、真っ黒になった死体をたくさん焼いて来た。師団長、参謀は後方の車に乗っていたので無事であった。

暗号班も引き揚げに出発、しばらく歩くと昨夜救助に行ったときは何にも無かったのに見渡す限りの泥水、我々の引揚げを妨害するために新四軍が河川を決壊したのだ。衣服靴を脱ぎフンドシ一枚になり、荷物を頭や肩に担いで、泥水の中を歩く。深みに落ち胸までつかる。真夏の太陽がぎらぎら照りつける炎熱の中を泥だらけの身体でやっと海州にたどり着いた。

一日分の飯を分配されて海州を出発した。しばらく行くと列車は停車した。前方を見ると左側の線路が長く浮いている。全員下車、線路工夫となって「つるはし」での重労働。夜間は危険で列車は走らない。新四軍が日本軍の優秀な兵器を中央軍（蔣介石）に渡す前に奪おうとするので非常に危険な状況にあった。

列車内は暑くて眠れないので、線路を枕に眠る。目を開くと夏の夜空は今にも星が落ちてくるように輝いている。徐州に無事帰れるか、無事日本に帰れるか、捕虜にされ重労働に使われるか、この先俺は一体どうなるのかと星空を眺めながら思う。食料の配給もなくなってしまった。

翌朝列車が進むとまた線路が破壊されているの

で「エンヤコロ」とつるはしを握る。手に豆ができ、破れ、痛む。こうして毎日線路を修理しながら普通八時間掛るのを一週間掛って徐州駅に着いた時は本当に嬉しかった。

師団司令部に帰った途端に「マラリア」になった。四〇度を越す高熱で「寒い、寒い」と震えながらいくら布団を着ても寒い。食事は何にも咽を通らず食欲も全く無い。線路を枕に眠っていて蚊に食われたのだ。ようやく三日目に熱が下がり食欲も出て来た。軍医部でマラリアの薬「キニーネ」をもらって飲む。マラリアと戦っている間に状況がすっかり変わってしまった。

師団司令部を中国側に渡し、旧日本人小学校へ引っ越した。校庭で武装解除が行われた。近くの旧砲兵隊の兵舎に移るため荷物を戸板に積んで小学校の門を出ると、道の両側にいた中国人民衆から石が雨霰と飛んできて頭や身体に当り、吃驚して走り出した。戸板から落ちたのを、民衆が奪い合っていた。逃げるようにして兵舎に駆け込んだ。「あーああ！　戦争に負けたのだ」と実感する。

旧砲兵隊の兵舎で昭和二十一年四月復員するまでの「八カ月」の捕虜生活が始まった。捕虜収容所内ではほとんど階級章は取り外していた。今まで上官から痛めつけられ、理不尽な命令にも服従させられ耐えて来た一部の兵隊が、将校・下士官もあるものかと反乱を起こしかけ、不穏な空気になってきた。将校・下士官は部屋に引きこもったきり、外に出て来ない。しかし暗号班だけは今まで通りだった。

森師団長は次のように訓示した。「軍から組織を取ったら烏合の衆だ。私は、師団長は君たち全員を無事日本に復員させる義務があるので、帰るまで軍の組織を保つように」と言われた。このような立派な森師団長、北野参謀のお陰で司令部全員無事復員することが出来た。

私と補充兵の元新聞記者平松、元ＮＨＫ名古屋の横井と三人で徐州の街の中にある居留民集落に住み込み、優秀なラジオで世界中のラジオ放送を

キャッチし、時に日本のニュースを編集印刷して、各部隊の捕虜収容所に「ミニ新聞」を配布する仕事をやりだした。

これは中国側に絶対内密でやっていた。中国側は日本の兵器、通信機、その他を接収したが全く使いこなせず、こちらから出向いて技術指導をしていた。横井と二人で「日本官兵捕虜」の腕章を左腕に巻き、腰に手榴弾を一個ぶら提げて（万が一に備えて）街の映画館に入る。堂々とした態度で「映写機の点検に来た」と伝える。そして映写室に丁寧に案内される。点検した後、館内に入ると中国人で超満員である。映画の始まる前に全員起立して中国国家を歌う。「蔣介石・万歳・万歳」と叫んでいた。

映画の内容はさっぱり分からない。日本人は私たち二人だけで異常な緊張感を味わった。映画館を出て街を歩いていると中国兵に会う度に当方から挙手の敬礼をしなければならない。今までと逆になってしまった。

中国側から「女子軍属を差し出せ」と難題を言って来た。司令部に二十人ほどいた女子軍属がそれを知り、「どうせ中国兵に身を任せるなら加藤さんに上げる」と二、三人言って来たが、軍首脳が中国側に物資を提供することで話がついた。

昭和二十一年四月、徐州駅前広場で中国側の荷物検査を受け、無蓋車の貨物列車に各兵の「リュック」を敷き詰め、その上に膝を両手で抱えて腰を下ろす。身動きも出来ないほどである。

列車は昼間走り、夜は停車する。真暗闇の中でじっと夜明けを待っていると真夜中に現地人が列車を囲み物凄い怒声で叫ぶ。我々の荷物を強奪しようと天秤棒や鍬を振り上げている。「盗られても決して車両から下りて追いかけるな。他の引揚列車で盗られた兵隊が荷物を取り返そうとして追いかけて行き、現地人に殴り殺されてしまったことがある」と言われた。

我々は何の武器も持っていない。我々の抵抗はただ睨み返すことしか出来ない。真近な現地人の

目を見ているだけ、警備している一人の中国兵は見ているだけで頼りにならない。睨み返すだけで十分利き目があって事故は起きなかった。最初の二、三日は空腹で苦しかったが、四、五日たつと頭がボーとして考える力も無くなり、眠くなり、眼をつむったらそのまま死んでしまうらしい。

日中は太陽の直射にさらされ、夜は現地人に囲まれ、特に夜明けの冷えることにも耐えた。雨が降らなかったことが幸いだった。こうして苦難の末一週間掛って上海の引揚宿舎にたどり着いた。

上海港前の広場で最後の検査を受ける。寒くはないがフンドシ一枚で何百人が整列している様は誠に壮観なものである。これが敗残兵の姿である。時計、皮の財布などを取られても日本に帰れる嬉しさに少しは我慢せねばならない。しかしまだ安心は出来ない。乗艦するタラップの両側に沢山の中国人が家族を日本兵に殺害された首実験をしている。そこの兵隊こちらへ来いといわれたらもうお仕舞だ。

甲板の上から中国大陸を眺め、二度とこんな馬鹿な戦争はしないであろう。勝っても負けても、終わって見れば、戦争ほどつまらないものはない。

夜寝苦しいので甲板に出た。空はよく晴れて星が輝いていた。米軍のＬＳＴ（復員船）は波静かな東シナ海を日本に向かって進んでいる。ふと見ると月明りの甲板上で七、八人の兵隊が二人の兵（古年兵）を囲んで足蹴りをしていた、「俺が悪かった。許してくれ！　日本に帰ったら何でもするから、命だけは助けてくれ！」と顔を甲板にすり付けて命乞いをしていた。私は柱に身をかくして見ていた。戦場でいじめられた仕返しか。家族に会えるのを目前にして、兵隊たちは暴れる兵の両腕両足を抱え、暗黒の東シナ海に放り投げた。悲鳴をあげながら落ちていった。

昭和二十一年四月二十一日午後三時、博多港に入港、リュックを担いでタラップを下りると両側にイギリス兵が青竹を持って待ち構えていた。思い切り尻を叩かれた。ＤＤＴの白い粉を全身に浴

びせられ、千円を受け取り貨物列車に乗った。どこの駅でも食べ物は売っていなかった。

翌日の夕方大垣駅で乗り込んで来た人が、いきなり私の目の前で真白な握り飯を食べ出した。私は昨日の昼から何にも食べていない腹ぺこだ。一滴の水も飲んでいない。ジーと見ていたら目と目が会い、握り飯を一個差し出してくれた。何んども頭を下げお礼を言って食べた握り飯のおいしさは、何十年たっても忘れられません。

焼野原の名古屋に帰って来た。幸い家が残っていた。しかし親父は失業で収入ゼロ、工場、会社は戦災に遭い働く場所も無い。長男の私に相談されても復員したばかりの私にはどうしていいか分からない。当時は治安も悪く、父母弟妹の面倒を見なければならない苦難の道が待っていた。しかし私は人に雇われ、人に命令されることなく、自由に生き！　やりたい仕事をやって来た。

昭和五十二年養心剣道教室を開設、剣道を通じて青少年の人間形成を続けている。七十歳から卓球を始め、全国卓球大会（年齢別）には六年連続で出場した。世界ベテラン卓球横浜大会（八十歳以上の部）では前年度世界チャンピオン（イギリス人）と対戦し善戦したことは、とても良い思い出となっている。

八十五歳の現在は戦争と平和の資料館「ピースあいち」でボランティアとして働いている。そして入場者の皆さんに二度と戦争を起こさないように、戦争体験者として戦場の悲惨さを語り続けている。

【解　説】

筆者の入隊した部隊は、独立歩兵第六十大隊、第三中隊に編入され軽機関銃班で初年兵教育を受ける。

上部部隊は第六十五師団、文字符は「専」部隊であった。第六十五師団は、昭和十八年五月、華中で独立混成第十三旅団を基幹に編成され、主として名古屋師団管区で誕生した諸部隊を加え、華

北の蘆州で編成された。

所属の歩兵部隊は、独立歩兵第六十大隊をはじめ、同五十六～五十九及び第百三十四～百三十六大隊であった。

師団は当初、同地の警備、保安、討伐などを担当していたが、徐州にあった第十七師団が南方に転用されることとなり、後を第六十五師団が担当となり、同じく徐州に司令部を設置して、徐州～蘆州方面の警備と治安維持の任務についている。九州より一回り広い地域を総兵力一万五千で警備し、その中には「麦と兵隊」の歌で有名な一帯麦畑の穀倉地帯があった。

ちなみに第十七師団は、姫路編成の師団で、鳥取、岡山、姫路の歩兵連隊から編成された部隊であった。同師団が昭和十八年に南方に転用されたが、転用先はニューブリテン島で、各連隊は各地に配属され、昭和十八年十二月、米軍が上陸、最後は終戦まで自活、耐乏の戦いであったという。

筆者は、この渦中にあった第六十五師団司令部の暗号教育隊で暗号教育を受け、その訓練の労苦を記録している。